

『想い出』に描かれたソクラテス

北 畠 知 量

はじめに

クセノポンは、ソクラテスを一体どのような人物として描いているのであろうか。

ディオゲネス・ラエルティオスによると、クセノポンは総計約四十巻ほどの著作を残したとされている。⁽¹⁾ そのすべてが今日に伝えられているが、その中で、現実のソクラテスの姿らしきものが描かれているのは、『弁明』と『想い出』だけである。ところが『弁明』の方は、『想い出』のはじめの部分と重複した内容となっているので、クセノポンがソクラテスをどのような人物として描いたかを知るのは、『想い出』に注目すればよいということになる。

それでは『思い出』において、ソクラテスは一体どのような人物として描かれているのであろうか。

I ソクラテスの愛知者像

クセノポンによると、ソクラテスは人々から愛知者と見なされていた。このことは『想い出』に登場するアンチポンの発言によって容易に裏づけられる。ソフィストのアンチポンは、ある時、ソクラテスに対して「愛知者というものは、元来、幸福でなければならぬのに、君は、愛知のために逆の結果を得ているようだ」と述べて、ソクラテスの貧困ぶりを揶揄しているからである。これに対してソクラテスは、愛知者だとされた点に対してはまったく反論せず、愛知者の生き方に関して、自分が追求しているのはぜいたくな暮らしではないと述べ、「自分も前より良い人間となり、友人をもますます善い人間にしてつきあえる」ということは、最も「楽しい」ことなのだ⁽²⁾と反論している。つまりこのソクラテスは、自分が愛知者であるということ⁽²⁾を認めた上で、愛知者の幸福観というものは、ソフィストのような俗物のそれとはちがうのだと主張しているのである。

ソクラテスは確かに愛知者であった。しかもソクラテスは、愛知が「幸福」と「楽しさ」をもたらす故に愛知していると言うのであるから、この場合のソクラテスの姿は、愛知の理由という点で、プラトンの描くソクラテスの姿と重なることになる⁽³⁾。

それではクセノポンは、『想い出』全体を通じて、ソクラテスを一体どのよう⁽³⁾にすぐれた個性的な愛知者として描いているのであろうか。

『想い出』全体は、雑多なエピソードの収録といった様相を呈している。アレクサンドリアの学者は、同書全体を、巻、章、節に区分けしたが、それらは、書かれている内容と対応していない。多くの箇所内容が重複しており、第四巻以外は、まことにまとまらないものとなっているが、あえて各巻の主題を探りながら、同書に描かれたソクラテス像を概観するならば、次の通りである。

第一巻の主題は、ソクラテスの人柄について述べ、彼を弁護することにある。

ここでクセノポンは、告訴された事柄（不敬罪と青年を堕落させた罪）に関してソクラテスの無罪を主張するとともに、彼がいつも「人間のこと」を問題にしていたという事実をふまえた上で、告発者を批判している。だがその部分は、一巻の一、二章を占めるだけであり、その他は、先の主題を受け継ぐ形で、神々に対するソクラテスの態度、生計や飲食や官能欲に対する彼の教訓が紹介されている。またこれに続いて、ソクラテスの学説（神の人間創造説、靈魂論）と、克己の指導と、愛知者としての生き方が紹介され、ソクラテスは人々を善美の道に教導するすぐれた人物であったことが強調されている。

第二巻の主題は友人論である。

同巻は、治者たる者の自己修養（克己、忍耐、自制）の問題から始まり、親の恩、兄弟愛について論じられているが、四章から後はすべて友人論となっている。ここに登場するソクラテスは、善き人物との交際を通して善き人物（君子人）になるように、様々な勧告を行なう人物である。

第三巻の主題は「將軍学」である。

この主題は、広い視野に立って言うと、国政論ということになる。

ソクラテスがこの方面で大きい人々の役に立ったことが一章から七章にわたって論じられ、その後は、ソクラテスが人々に示した実用的な知識、諸々の徳目の定義、あるいは職人達や娼婦との対話、身体鍛練の勧めなどが細々と紹介されている。

第四巻の主題は教育（学問）論である。この巻は大きく三つに分けることができる。すなわち(1)一、二章では、ソクラテスが自分の弟子以外の三つのタイプの人々に、どのような形で学問の勧めを行なったかということが紹介されている。(2)三章から七章までは、ソクラテスが自分の弟子達にどのような教育指導をしたかが様々な項目に則して述べられており、(3)最後の八章では、若干のエピソードを追加した上で、ソクラテスの人柄についてふれ、彼こそは敬神の念あつき正義の人であり、人々を「美德ならびに君子の道」につかせた人物であったと認めにくくられている。

さて、以上に概観したところからすると、ソクラテスは、すぐれた個性的な愛知者というよりは、むしろ、様々な人々を善美の人（君子人、美德ある人間、まともな人間、思慮ある人、己れを知る人、知恵・勇気・敬虔・正義・克己心のある人間）へと教導する人物として描かれていると言った方がよい。

II 愛知の重み

それではクセノポンの描くソクラテスは、人々を善美の人へと教導する際に、愛知を一体どの程度重視しているであろうか。

この点に関しては、次の二点を指摘することができる。

「1」ソクラテスが人々を善美の人へと教導した方法は実に多種多様であり、愛知は、確かに重要ではあるが、それらの方法の一つであって、決定的な重みをもっていない。

確かにクセノポンは、ソクラテスについて次のように述べている。

彼自身はいつも人間のことを問題にし、敬神とは何か、不敬とは何か、美とは何か、醜とは何か……その他にこうした題目を論じ、そしてこれらを知る者は君子人であり、知らぬ者はまさに奴隷者と呼ばれ、⁽⁴⁾も致し方ないものと考えた。

彼は正義をはじめその他すべての徳も知であると言った。……知者は美にして善なることを行なうが、知者でない者は行ない得ないし、行なおうとしても失敗するのである。従って、正義やその他の一切の美にして善なることは、彼によって行なわれるのであるから、正義およびその他の一切の徳が知であることは明らかだというのであった。⁽⁵⁾

ソクラテスのこのような考えによると、人間は諸々の徳目に関する知を愛し求めることによって善美の人（君子人）になれるということになる。その限りにおいて、徳目に関する愛知はきわめて重要な意味をもつことになる。しかしながら、ソクラテスはその種の愛知の勧告に専念しているわけではない。『想い出』全体を見渡してみると、ソクラテスは、人々の見解を様々に批判し、人々に注告し、誤った考えを正し、訓戒を与え、自ら実行することによって人々に範を示し、冗談にさえ教訓をこめて話し、討論を指導し、欺瞞をいましめ、先生を紹介し、人々を諭し、処世術を教え、学問の手ほどきをし、健康に留意するように説き、様々な人々の役に立ち、人々を助け、家屋の建築の指導さえしているからである。

以上のような諸例から考えてみると、ソクラテスは、徳目に関する愛知を確かに重複しているけれども、この愛知の勧告が、その他の事柄に関する教導や注告や助言などとは異なつた決定的な重みをもっているようにはみえないのである。

〔2〕善美の人となるための愛知には次のような三つの制約が課せられている。そのためにソクラテスの勧告する愛知は、結局、実用的な知識の習得に帰着してしまう。

まず第一に、ソクラテスは愛知を勧めているが、それはあくまでも人間的な知の限界を超えてはならず、人知でもって神的な知（例えば天界現象や宇宙の性質など）を知ろうと欲したり、あるいは逆に、人知の領域の問題（実用的・常識的な諸問題）を考える際に、神意を問うようなことをしてはならないとされている。この種の制約は、神が人間の愛知に対して課した制約ということになる。⁽⁶⁾

第二、ソクラテスは、善美な人となるための人間的な愛知の指導そのものに対しても一定の制約を課している。

このことを具体例に則して見てみよう。己れの知を自負していた秀才少年エウテュデモスは、ソクラテスの吟味をうけて途方にくれ、次のように告白する。

「正直のところ、ソクラテス、私は大いに愛知（字）にいそしんでいるつもりでした。そしてこの学問こそ、

高雅有徳に達せんことを望む人間に、必須の事物をもっともよく教えてくれるものと、考えていたのです。

ところが、こう何もかもわからなくて、せっかく勉強したのに、何よりも知っているべきことをたずねられて、少しも答えができず、自分ながら情なくなっているのを、あなたは何とお思になるでしょう。し

かもこの道よりほかに自分を改良する道がないのです」⁽¹⁾

これはまさにアポリア（行き詰まり）である。この場合、プラトンの著作に登場するソクラテスならば、ここで立ち去るか、場合によっては助産の役をはたそうとするであろう。そのことによって、知の次元が更に深められていくことになる。ところが『想い出』に登場するソクラテスは、エウテュデモスが心をいれかえて自分に師事するようになると、この吟味で「彼を苦しめること」を止め、「知らなくてはならぬと思う事柄や、日常生活にもっとも必要と思う事柄を、きわめて簡明に、またきわめてわかりよく、説明して聞かせる」のである。こうしてソクラテスの愛知の指導は、知の次元を深めることなく、善美の人の実生活に必要不可欠とされる実用的知識の習得という点に落ちつくことになるのである。

第三に、実生活に関する学問的な知識といえども、これを学ぶべき程度に関しては、一定の制約が課せられている。ソクラテスは、「正しく教育された人間は、各々の問題についてどの程度までこれに習熟すべきか」を教えており、幾何学は土地の測量ができる程度、天文学は方位や時刻がわかる程度、算法は実際に役立つ程度といった具体例をあげているからである。⁽⁸⁾

愛知にこのような三つの制約が課せられているために、愛知は、結局のところ、実用的な知識の習得に帰着することに成り、それ故にまたここでの愛知は、善美な人となるための決定的な要因とはなくなってしまっている。である。

結 語

以上のように見てくると、『想い出』に登場するソクラテスは、愛知者として描かれてはいるものの、その内実は、実用的・実的な知識を重視する「善美への教導者」に他ならないと言えよう。

注

クセノポン『想い出』に関しては、Xenophon: Memorabilia, E. C. Marchant, Loeb C. L.を用い、邦訳は、佐々木理『ソクラテスの想い出』岩波に依拠した。引用箇所はMenと略記してある。

- (1) D. L. II. 6. 57 『アナバシス』『キュロスの教育』『ギリシア史』『想い出』『饗宴』『家政論』『馬術について』『狩猟論』『騎兵隊長論』『ソクラテスの弁明』『歳入論』『ヒエロンあるいは僭主について』『アゲシラオス』『アテナイ人およびラケダイモン人の国制』 最後の書物は疑わしいとされている。
- (2) Mem. I. 6. 1~9
- (3) プラトン著作に登場するソクラテスは、我々が愛知すべき理由に関して様々な見解を表明している。けれども、『プロタゴラス』『エウテュデモス』『饗宴』に登場するソクラテスは、幸福というただ一つの理由をあげ、人間は愛知することによってどうして幸福になれるのかということを理論的に証明しようとしている。
- (4) Mem. I. 1. 16
- (5) Mem. III. 9. 5
- (6) Mem. I. 1. 9 一昔前に台頭してきた自然学を念頭におくなら、この制約は、明らかに自然学に対する反動である。クセノポンの描くソクラテスは、プラトンのそれよりも自然学に対する反動傾向が強い。
- (7) Mem. IV. 2. 23
- (8) Mem. IV. 7. 1~8

北畠 知量（本学教授・教育学）